

# 東寺と西寺

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



現在の西寺跡 (南西から)

公園中央の土壇にかつて講堂があった。



現在の東寺 (南西から)

大きなお堂が建ち並び創建時の状況をよく伝えている。

毎月21日、東寺の境内は「弘法さん」でにぎわいます。そんな人ごみをよそに、西へ約1km行くと、中央に土壇のある公園があります。これが西寺の跡です。この二つの寺は、同時に造られました。一方は今でもにぎわい、他方は地上から姿を消してしまいました。このように対照的な道をたどったお寺について、お話ししましょう。

今から1200年前、都が平安京に移ります。それまでの都(平城京・長岡京)には京内に多くの寺がありましたが、新京の中には二つしか造られませんでした。それが東寺と西寺です。二つの寺は、平安京の南辺、九条大路に面し、

朱雀大路をはさんで、対称の位置に配置されました。東寺は左大寺とよばれ、左京さらには東国を護るために、西寺は右大寺とよばれ、右京、西国を護ることを目的として造られた官営の寺院です。

このため、寺造りには特別の役所が置かれました。菟道岡本(宇治市岡本町)には東寺、牧野坂(枚方市牧野町)には西寺が瓦屋(瓦工場)を置いて、それぞれの瓦を大量に作っていました。牧野坂から発見された瓦の文様から、西寺の瓦屋には、かつて東大寺を造った平城京の役所が関係していたと考えられています。

両寺の建設工事は、都造りといっ

しよに進められましたが、規模が大きかったためか、なかなかはかどりませんでした。中でも、東寺は、9世紀前半になって講堂や塔などが造られはじめ、後半にやっと完成しました。造り始めてから、50年近くもかかったことが記録に残っています。

西寺は、律令国家を護る寺として、国の行事の会場となり、また各地の僧侶を取りまとめる役所が置かれ、発展しました。ところが正暦元年(990)に火事にあい、なかなか復旧できませんでした。さらに、天福元年(1233)には残っていた塔が焼け落ち、律令体制が落ちぶれると共に埋もれてしま



西寺・伽藍北限の様子（北西から）

北側には築地の跡が東西にのび、南側には礎石を用いた建物跡がある。

ました。

一方、東寺は弘仁14年（823）に、嵯峨天皇によって空海（弘法大師）に与えられ、真言宗の寺にかわりませんが、平安時代後半にはしだいに荒れ果てました。しかし、平安時代の終わり頃から鎌倉時代にかけて、源頼朝の援助を得て、文覚上人が大規模な修理を行ないました。中世以降は、皇族や時の権

力者の手厚い保護によって発展します。また、広く一般庶民による信仰が支えともなり、災害や戦争による破壊のたびに復興されました。こうして東寺は現在まで法灯を伝えていきます。

近年の発掘調査で東・西両寺の様子が具体的にわかってきました。

それによると両寺の大きさは、東西2町（約250m）・南北4町（約520m）で、それぞれ8町（13ha、甲子園球場の3.3倍）の広さです。敷地の南側半分は、高い塀と門によって囲まれ、主な堂や塔があります。南辺には、大きな門（南大門）があり、中門・金堂・講堂・食堂が一直線に並びます。

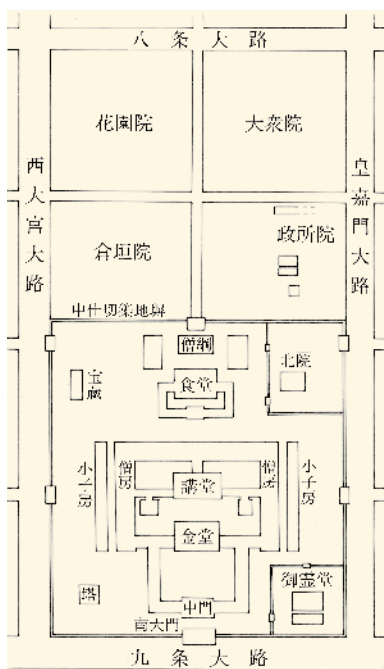
中門と金堂は廊下によって結ばれ、講堂の回りを僧房が囲んでいました。東寺は南東部に五重塔、西寺は南西部に塔が推定でき、左右対称の形でした。

主な建物は、いずれも高い壇（基壇）の上に建てられ、朱色の柱と白い壁、屋根は緑釉瓦（緑色の釉薬をかけた瓦）をアクセント

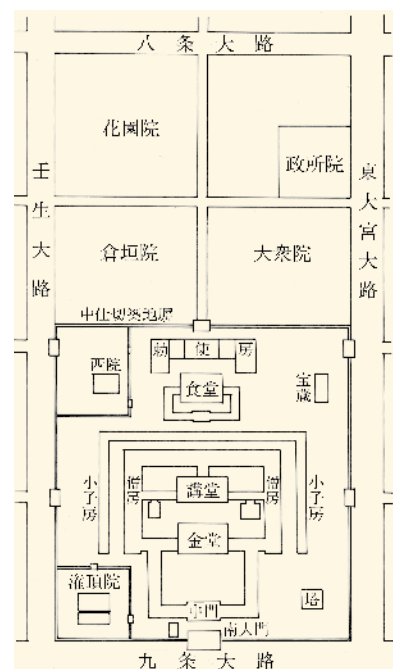
に使った大きく豪華なものでした。

敷地の北側半分には、寺のやりくりをする役所やそこに勤める人達の生活の場、花や作物を作る畑などがあります。これらの建物は、掘立柱建物（地面に穴を掘って柱を建てる）で、屋根には瓦や檜皮を葺いていました。

（上村和直）



西寺復元伽藍配置図



東寺伽藍配置図